チャペル週報

No.17

2017.10.9 ～ 10.13

秋季宗教運動特集号

そこではもはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、
奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。
あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。
（ガラテヤの信徒への手紙３章28節）

大学図書館屋上より

関西学院宗教センター

☆ チャペル・スケジュール ☆

時間 10：35～11：05　　場所 各学部チャペル

10月９日（月）
神 高　須　純　子（神学部４年）
経 秋季大学キリスト教週間を迎えて①　舟　木　　譲（宗教主事）
人 大　石　健　一（茨木春日丘教会牧師）
理 前　川　　裕（宗教主事）
聖和 聖書物語「山の上でなさったお話」

10月10日（火）
神 夏期派遣実習報告　有　澤　　安（神学研究科Ｍ１）
文 Jeffrey Mensendiek（宗教センター宗教主事）
社 「幸せ」って何だろう？④　水　野　隆　一（神学部教授）
法 北　山　俊　哉（法学部教授）
経 音楽チャペル　ゴスペルクワイア"P.O.V."
商 Chapel in English　Curtis Rigsby（宣教師）
国 学生活動報告（１）　堀　　明　音（国際学部３年）
理 前　川　　裕（宗教主事）
総 本　田　　盛（総合政策学部教授）
教 平　野　恵梨奈（教育学部２年）、築　家　咲都子（教育学部２年）

10月11日（水）
神 私にとっての宗教改革②　岩　野　祐　介（神学部教授）
社 「幸せ」って何だろう？⑤　大　岡　栄　美（社会学部准教授）
法 Christian Morimoto Hermansen（宣教師）
経 秋季大学キリスト教週間を迎えて②　舟　木　　譲（宗教主事）
人 桜　井　智恵子（人間福祉学部教授）
国 学生活動報告（２）　豊　田　真　椰（国際学部３年）
理 KSCハンドベル＆アンサンブル
総 村　瀬　義　史（宗教主事）
教 梶　原　直　美（宗教主事）

10月12日（木）　大学合同チャペル「身近にある『グローバル化』」　10：20 ～ 11：20
西宮上ケ原キャンパス　会場：中央講堂
「難民と考えるグローバル化」　テュアン・シャンカイ（総合政策学部卒業生）
神戸三田キャンパス　会場：Ⅵ号館101号教室
「国際ボランティア活動を体験して」
半　井　翔　汰（経済学部３年）、森　口　侑希奈（総合政策学部３年）
西宮聖和キャンパス　会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
「国際ボランティア活動を体験して」
西　井　智　則（教育学部４年）、奥　村　南　実（経済学部３年）

10月13日（金）　大学合同チャペル「身近にある『グローバル化』」　10：20 ～ 11：20
西宮上ケ原キャンパス　会場：中央講堂
「交換留学生のイメージからみる『グローバル化』」
リア・ジーン・ロバーツ（アメリカからの留学生）、
ステファノ・ヴァレンティノ・スギヤント（インドネシアからの留学生）
神戸三田キャンパス　会場：Ⅵ号館101号教室
「難民と考えるグローバル化」　テュアン・シャンカイ（総合政策学部卒業生）
西宮聖和キャンパス　会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
「トロントでの海外拠点研修を通して」
木　村　　愛（キャリアセンター職員）

◇ランバス早天祈祷会　８：20 ～ ８：40　　ランバス記念礼拝堂（西宮上ケ原）
10 月 12 日（木）　宗教運動のために　　木　村　　仁（宗教活動委員会伝道部長）
10 月 13 日（金）　教育学部のために　　今津屋　直　子（教育学部長）

大学キリスト教週間への招き
－身近にある「グローバル化」－

大　宮　有　博

「帰る時に横切るいつもの公園で、子どもたちが暗くなっても遊んでいるの。そういえば、この子たち、昼間もここで遊んでいたわ。」

気になったKさんは、子どもたちに声をかけました。Kさんが声をかけた子どもたちは、フィリピンから日本に働きに来ている人たちの子どもでした。この子どもたちの親は、様々な理由でこの子たちの出生届を出せなかったのです。例えば日本で働いているうちにオーバーステイになってしまったり、お母さんが日本人のお父さんのDVから逃げていたり…。ですからこの子たちは就学する年齢になっても学校に行けず、公園で遊んでいたのです。

このKさんが教会に声をかけて出来たのが、国際子ども学校です。約20年の歴史があります。最近では、国籍のない子どもたちも含めて、海外にルーツを持つ子どもたちの公立学校への受け入れの状況は少し変わりました。

日本で働く外国人労働者の数は、1980年代に急増しました。今では100万人を超えます。ですが日本はこれまで外国人を保護ではなく、管理の対象としてきました。そのため外国人労働者の法的地位は常に不安定です。多くの外国人労働者が解雇に怯え、安い賃金で働いています。

旧約聖書に記されたイスラエルの法は繰り返しこう命じます。「寄留者があなたの土地に共に住んでいるなら、彼を虐げてはならない。あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。わたしはあなたの神、主である。」（レビ記19章）　聖書の証しする神は、最弱の人々を選び、抑圧から救い出しました。ですから、その神に救い出された民による国では、自分たちの間にいる外国人を心から大切にするのです。

そしてイエスは最弱の人々に自らを同一化させることによって、神が外国人の神、家を持たない人の神、虐げられた者の神であることを示しました。このイエス・キリストの精神によって教育と研究を行う関西学院が、誰と寄り添うべきかは明らかです。

今秋のキリスト教週間のテーマは「身近にある『グローバル化』」です。以下のサイトを見て、身近なグローバル化について考えて下さい。

移　住　連　http://migrants.jp/
難民支援協会　https://www.refugee.or.jp/refugee/

（法学部宗教主事）

難民と考えるグローバル化

テュアン・シャンカイ

世界には、およそ6,560万人の難民がいるといわれています（2016年末時点）。

難民という言葉の定義は「祖国で迫害を受ける恐れがあるために他国へ逃げざるを得ない人」とされています。

日本でも1980年代のインドシナ難民の受け入れにより難民が日本にやってきており2016年末までに約２万人の難民がいると言われています。なお昨年では約１万人が難民申請をしましたが、日本政府が難民として認めているのは年間数十人程であるのが実情です。

認定は少ないという現状でありますが、日本各地では難民を支援する様々な取り組みが行われています。この関西学院大学では、2006年より日本で初めて「難民を対象とした推薦入学制度」が導入され、現在までに11名の卒業生を輩出しています。私もこの制度の第６期生として総合政策学部に在籍しました。また、私自身も大学在学中に難民問題をより身近に捉えて欲しいという願いから、日本で生活されている難民の方々の祖国の味を大学の学食などで提供する「Meal for Refugees」という団体を立ち上げ、これまでに全国で約30大学に導入されました。現在は、インターネット関連企業に勤める傍らで、関西に在住するシリア難民の子供達へ教育面でサポートする活動を関西の大学生と共に行っています。

このように民間や個人の力によってあらゆる分野において難民支援や認知啓発が行われています。しかしながら、難民問題は、解決が難しい問題であり、あたかもニュースの中での出来事だと思われがちです。しかし、日本でも約２万人の難民がいることから私たち自身も難民という存在を身近に捉えて頂きたいと思っています。

移動する民と書いて移民であれば、難民は決して難しい民ではなくむしろ困難を乗り越える民だと考えます。人間も絶えず移動するうえにいつだって困難を乗り越えてきました。

日本に暮らす私たちも違いを受け入れる寛容さを持ち、多様性を価値として受け止めることでよりグローバルになるのではないでしょうか。

（総合政策学部卒業生）

テュアン・シャンカイ氏： 総合政策学部卒業生。ミャンマー難民としての経験をもとに、関西に在住するシリア難民への教育支援などを行っている。

トロントでの海外拠点研修をとおして

木　村　　愛

2014年９月から2015年３月まで、職員の海外研修（海外拠点研修）にてカナダのトロントに派遣され、冬のカナダで英語を勉強する日々を送りました。

トロントはカナダ最大の都市、人口は約261万人。大阪市よりもやや少ない人口の都市です。しかしながらその261万人の内訳は多彩で、人口の半分はカナダ以外の国で生まれているという移民の街でもあります。街中で英語以外の言語が聞こえることは日常茶飯事、救急電話も150以上の言語に対応しているというので驚きます。街中には、ネイバーフッドと呼ばれるローカル色の濃いエリアがいたるところにあり、インド、イタリア、ギリシア、ジャマイカ、ポルトガル、韓国、中国などそれぞれの国・地域の食材や日用品を取りそろえて個性的かつ強烈なオーラを放ってトロントの街をより魅力的にしています。

そんなトロントの街で、語学学校で世界各国から集まる留学生と共に学び、トロント大学の中にある関西学院の海外拠点に通い職員や学生と交流していく中で、英語が満足に話せず悔しい思いをしたり、逆に言葉が十分でなくても工夫することで相手に思いを伝えることができたという自信を得たりと様々な経験をすることができました。

「グローバル」は「世界的な」「包括的な」という意味ですが、この言葉について考える時、私はいつもトロントで出会った友人たちを思い起こします。様々な事情で、時には日本では考えられないような理由でカナダに移民としてやってきた、留学生として学びに来た、異なる背景を持った友人たち。彼らと話す中で、「グローバル」を体現するためには「まず目の前の人をまずは大切にする、尊重する」ことが大切であると痛感しました。いかに言語を上手く運用できるか・いかに「グローバル」であるということを意識しているかということが問題ではなく、目の前の人の背景、思いや考えにどれだけ向き合い、どれだけ理解に向けて努力するか。その姿勢こそ「グローバル」という視点の原点になるのではないでしょうか。

大学生活は利害関係なく様々な人に出会える、かけがえのない時間です。今与えられた時・環境・人を大切に日々の学生生活をすごしてください。

（キャリアセンター職員）

●ポスター展　「＃HereIstand我ここに立つ－マルティン・ルター、宗教改革とそれがもたらしたもの」

1517年とマルティン・ルターは、歴史を振り返る上で重要な年号、人物です。しかし、それらに対する受け止め方は、後に続く世代ごとの判断に委ねられてきました。このポスター展では、国民的英雄としてのルター像から離れて、彼の両面価値的な姿に迫ります。

2017年10月９日（月・祝）～13日（金）
関西学院大学神戸三田キャンパス　アカデミックコモンズインフォメーションホール
2017年10月16日（月）～20日（金）
関西学院大学西宮上ケ原キャンパス　大学図書館エントランスホール
主　催：大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館、関西学院大学キリスト教と文化研究センター
共　催：大阪日独協会

●オルガン音楽の泉 2017 Fall semester

パイプオルガンの響きに憩うお昼のひととき、どなたでもご自由にお楽しみください。

第21回　10月10日（火）　臼井　真奈（ドイツ・グレーベンシュタイン市教会オルガニスト）
第22回　10月18日（水）　中山幾美子（同志社女子大学音楽学科嘱託講師）
第23回　11月28日（火）　濵　　裕子（衣笠病院教会オルガニスト）
第24回　12月６日（水）　能島　亜未（本学オルガン講師）
いずれも12：50～13：20［開場12：40予定］
ところ：関西学院中央講堂（125周年記念講堂）
主　催：宗教センター

●大阪梅田キャンパスチャペル

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アプローズタワー14階の大阪梅田キャンパスでは、大学院授業期間中の毎週木曜日にチャペルアワーを開催しています。（17：50～18：20　1405教室）

10月主題：「宗教改革500年を記念して」
10月12日（木）　Jeffrey Mensendiek（主教センター宗教主事）
10月19日（木）　嶺重　　淑（大学宗教主事）
10月26日（木）　舟木　　譲（宗教総主事）

●関西学院会館の日曜礼拝

授業期間中の第二・第四日曜日（原則）に、教職員と学生有志による礼拝が行われます。
どなたでも参加できますのでどうぞお越しください。

10月22日（日）10：00～11：00
関西学院会館ベーツチャペル

●夕べの祈りatランバス～テゼの音楽とともに～

ろうそくの光を灯して、テゼの歌を歌いながら、皆でこころ静かに過ごす夕べの祈りのひとときです。どなたでもご参加ください。

第３回　10月19日（木）18：30～20：00
第４回　１月11日（木）18：30～20：00
ところ：ランバス記念礼拝堂（西宮上ケ原）
主　催：夕べの祈り準備会（学生有志）
協　力：関西学院宗教活動委員会

●関西学院宗教改革500年記念礼拝「かみはわがやぐら」

1517年10月31日、ドイツの修道士マルチン・ルターがヴィッテンベルク城門に、教皇にむけて95箇条の質問状を公開した。そのことをきっかけとして西欧キリスト教のなかに新たな動きが生まれ、ルターたちは「プロテスタント」（抗議する者）と呼ばれ、それまで支配的であったカトリック教会から、独自な「プロテスタント」キリスト教が成立することとなった。関西学院もまたプロテスタントの立場に基づくキリスト教主義によって立つものであり、本年その500年を特に覚えて、記念の礼拝を守ることとしたい（田淵院長）。

と　き：2017年10月31日（火）17：00～18：30
ところ：ランバス記念礼拝堂（西宮上ケ原）
内　容：メッセージ「信仰によって義とされる」田淵　結（院長）
　　演奏「バッハ／カンタータ第80番　全曲」ほか
主　催：関西学院